

【共同研究】

## 『感情イメージ調査』についての研究（Ⅲ）

### － 個別対象の感情イメージ構造の

### 安定性と対象語・感情語の選定 －

鈴木 賢男\* 大石 昂\*\* 松野 真\*\*\* 堀内 正彦\*\*\*\*  
鈴木 国威\*\*\*\*\* 大平 泰子\*\*\*\*\* 藤森 進\*\*\*\*\* 岡田 斉\*\*\*\*\*

Research on the Questionnaire on Affective Imagery (QAI), 3rd Report:  
Individual Stability of Emotional Significance Represented by the Relationship  
between Affective Word Ratings and Object Words and Word Selection

Masao SUZUKI, Takashi OISHI, Makoto MATSUNO, Masahiko HORIUCHI,  
Kunitake SUZUKI, Taiko OHIRA, Susumu FUJIMORI, Hitoshi OKADA

This is the 3rd report in a series of studies on analysis of the Questionnaire on Affective Imagery (QAI). Developed by Takashi Uesugi (1981, 1982, 1983, 1989, 1998, 2000), the QAI is a list of paired words with a rating scale. The word on the left in each pair is an “object word” (32) like self, father, mother, family, or social. The word on the right is an “affective word” (8) like joy, hope, love, astonishment, sorrow, fear, anger, or disgust. The 1st Report noted that current college subjects displayed the same structure of Affective Imagery despite the substantial passage of time. The 2nd Report described a model in which the scales comprising Affective Imagery (positive/negative images) of Cause-Objects (ex. father, mother, and relatives) influenced the imagery of Result-Objects (ex. job, death, art, or journey). Those scales were found to be related to “neuroticism” or “agreeableness” in the NEO-FFI (Big5 Personality Inventory)

The current study examined the stability of the structure of affective imagery with regard to 32 object words. Subjects were 60 male and 58 female college students. The results of the study were, first, that 8 emotional ratings of 16 words concerning a familiar object (ex. father, home, school, or health) were relatively stable compared to other words (ex. husband, office, or art). Second, the resulting affective value calculated from 8 affective ratings with respect to the 16 words did not vary regardless of indiscriminate or discriminate weighting of the object word.

---

\* すずき まさお 文教大学人間科学部非常勤講師  
\*\* おおいし たかし 富山国際大学子ども育成学部  
\*\*\* まつの まこと 千葉県健康福祉部児童家庭課  
\*\*\*\* ほりうち まさひこ 駒澤大学文学部  
\*\*\*\*\* すずき くにたけ 慶応大学先端研究センター・ふたご行動発達研究センター  
\*\*\*\*\* おおひら たいこ 富山国際大学子ども育成学部  
\*\*\*\*\* ふじもり すすむ 文教大学人間科学部心理学科  
\*\*\*\*\* おかだ ひとし 文教大学人間科学部臨床心理学科

## はじめに

本研究は、一連の「『感情イメージ調査』についての研究」の第Ⅲ報となる。「感情イメージ調査」そのものは、上杉喬（2005年12月6日物故）によって1981年から2000年に至るまで進められており、生活を取り巻く身近な対象に対する全体的な感情が、喜び、悲しみ、愛、嫌い、望み、驚き、怒り、恐れという8つの要素的な感情を成分としてもつことを仮定した上で、これらの成分がプラス成分とマイナス成分に分かれること、それぞれの成分が一定程度の割合で、潜在する全体的な感情状態に関与することを数量的に明らかにしてきた。また、プラス成分とマイナス成分を合成することにより、個別の対象に対する全体としての感情的なポジティブ傾向（あるいはネガティブ傾向）の度合を感情価として算出することを試みており、どの身近な対象に、よりポジティブな全体的感情を抱いているかを明らかにすることを可能にした。更には、個々の対象の感情価の関連性を分析し、調査対象者の周縁にある諸対象の“感情的意味”がどのような内容を持つものであり、それがどのように構造化されているのかを考察することにまで及んでいる。

この対象に対する“感情的意味”は、感情イメージという概念が成立するための前提となるような考えになると考えられる。一般的に感情についての現象は、知的な活動とは対極的に考えられており、極めて瞬間的に自動的に生じる事後行動への準備状態としてとらえていることが多い。場合によってはその状態を意識できるときもあるとする（例：ドキドキ、ウキウキ）。それは、目前にある刺激や出来事に対する感情反応として顕著に現れるものと理解されている。これに対して、感情的意味は、感情体験として現れるものと考えられる。通常、体験というものは、出来事の開始から終了までの一定の時間経過を必要とし、その過程の中で種々の感情反応が生じていきながら、結果としてまた別の感情反応が生じていると予想される。時として、当初の感情反応とは正反対の矛盾したような感情反応が最後に生じる場合すらあ

る。このような全般的な過程を理解するためには、記憶や思考活動による知的で認知的な働きが必要となってくるであろう。例えば、進学のための受験勉強は、どちらかといえば大変な苦勞があるので快くない感情（not pleasant）をもたらずが、成果が実って無事に合格したあかつきには、心地よい感情（pleasant）をもたらずのものである。苦しいけれど努力することには価値がある（good）という感情的意味が、一定の期間続いた受験体験には、現れてくると考えてよいであろう。

おそらく、この感情反応と感情体験の異なる諸相を比較するために、感情現象には2様の状態があり、目前の対象に対して速やかに生起するその時々感情と、記憶や思考活動を経ることで目前に対象がない場面を思い起こし、他の時の場面と比較し照合しうる状態にある感情を区別し、後者の状態にある感情を、感情イメージ（affective imagery）と、上杉は名づけたと考えられる。感情イメージを研究する際に、その感情イメージが向けられる対象として上杉が選んだ単語は、いずれも、その調査対象者の生活で比較的良好に関わるものであり、卑近なものではなくてごく身近な人や物あるいは概念を示している（例、父・母・社会など）。つまり、結果として同一の対象に対して、異なる感情的な場面を豊富に体験しているであろう対象を対象語として取り上げていることが、感情イメージに関する定義をより典型的に反映させるための条件だったのだと考えられるのである。上杉（1981, 1989）は、大学生を調査対象とする場合には、「父」や「母」などの他に、「学校」「勉強」などの学校生活に関わるものなどを取り入れて30～32の対象語をあげて、社会人を対象とした場合には、学校生活の部分を「会社」「上司」「昇給」などの会社生活に関わるものなどに組み替えている（上杉 1983, 1984）。しかし、これらの異なる対象語を含みながら、また、調査対象者が異なっていながらも、対象語を区別せずに生活を取り巻く身近な対象としてまとめてみた場合、潜在的な全体的感情の成分と仮定した8つの感情の対象語に対する評定値は、必ずプラス感情とマイナス感情の2極性を示し、その関連性の程度がほぼ一致しているという安定した構造を示し

たのであった。

これを受けて、本研究に連なる第1報では、年代を経た昨今の大学生においても、これと同様な構造が得られているのかを確認するために、感情イメージ調査票を復元して、同様な手続きで実施・分析をした。8感情の評定値に対する因子分析の結果は、驚きや怒りにやや顕著な変動が認められるものの、主因子解の第1因子の2極性が同じであること、各感情の因子負荷量の大きさがほぼ等しいこと、感情間での相対的順位(負荷量の大きさの順番)が保たれていることなどを認めることができた。また、これに続く第2報では、異なる調査対象者に対して調査を実施し、同様な因子分析をしたところ、年代をさかのぼるデータよりも直近のデータの方が、より類似した結果を得ることになり、身近な諸対象に対する8感情間の関連性はかなり安定したものであることを明らかにすることができた。

しかしながら、これまで確認されてきた8感情間の関連性における安定性は、あくまでも対象語の区別をしない全体としてのものであった。そこで、第3報である本研究では、全体としてはもちろんのこと、32の対象語それぞれに対する8感情間の関連性が、異なる調査対象者においても同様に認められうるものかどうかを分析し、比較的安定した構造を示す対象語とそうではない対象語とを選別することを試みる。また、選別された安定度の高い対象語のみで、8感情評定値を重みづけした合成値である感情価を算出し、対象語ごとの感情価の高低、および対象語についての感情価間の関連性、パーソナリティ特性との関連性について、第2報と同様な結果を示しうるかを確認する。更に、重みづけされた合成値である感情価を8感情の評定値(素点)から統計的に予測する場合、8感情語のどの成分が有効であるかを検討する。以上のことを研究Ⅰ～Ⅲの目的とした。

## 方法

### 1. イメージ調査法

イメージ調査法では、上杉(1979)によって開発された独自の調査用紙(イメージ調査票)が

用いられた。この調査票は、感情研究としてのSD法と、創造性開発技法としてのKJ法(川喜多次郎, 1965)からヒントを得ているものであり(上杉1981)、対象語(ex.私、父、母など)と感情語(ex.喜、愛、悲など)を対にして示し、対象語の具体的内容(すなわち、各人の体験の中にイメージとして存在している内容)としての「対象」をイメージさせ、その「対象」のイメージと、感情語からイメージされる感情イメージの<近さ-遠さ>を、5段階で主観的に評定してもらうものである。

採用した対象語は、本調査に至るまでの一連の研究と同様、上杉(1989, 2000)と同じもので、学生を取り巻く諸対象を表す32語、感情語については、感情イメージ調査が行われて以来、一貫して用いられている漢字一文字による8語を用いた(Table 1)。この感情語の元は、水島恵一(1979, 1980, 1981)によるカード式投影法(図式的投影法)の感情カードで使われていたものである。対象語と感情語の対は256対となるが、その一部を、Table 2に表した。なお、対象語と感情語の対提示の順番は、改めて無作為に決定し、調査用紙自体は新たなものを印刷し、これを用いた。

Table 1. 感情語と対象語

【感情語】 8							
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
【対象語】 32							
私	父	母	夫	妻	兄弟	姉妹	恋人
友人	仲間	家族	家庭	親類	近隣	学校	集団
職場	社会	仕事	勉強	生活	遊び	趣味	旅
健康	病気	生	死	文化	芸術	人類	自然

Table 2. イメージ調査票(その一部)

			近	や	い	や	遠
			い	や	え	ち	い
				近	な	ら	遠
				い	い	と	い
						も	
1.	私	—	嫌				
2.	芸術	—	恐				
3.	死	—	驚				
4.	父	—	愛				

## 2. 対象者

対象者は、文系のX大学大学生であり、男性60名、女性58名、計118名であった。平均年齢は、男性が18.3才 (SD=0.52)、女性が18.2才 (SD=0.53) となっていて、ほぼ全員が1年生であった。

## 3. 手続き

調査実施時期は、授業開始から2週間後、2010年4月19日と4月28日で、それぞれ2コマずつ別々のクラスで、調査票を一斉に配布し、その場で回答してもらった後、即回収をした。調査用紙に記載された教示は次の通りである。

次のページから、全部で4ページにわたって、1～256のことばの対があります。左側はいろいろな対象や事象を表していることばです。右側のことばは、感情語です。

各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのびったりするところに、○印をつけて下さい。

## 研究 I 対象語別の感情イメージ構造の安定性

### 1. 目的

対象語を区別せずに8感情による評定値に対して因子分析を行った場合には、第1報 (2008) と第2報 (2009) とともに、主因子解の第1因子負荷量には、正負の符号 (+と-) 双方が認められ、一方をプラス感情語群 (喜・望・愛)、他方をマイナス感情語群 (悲・怒・恐・嫌) として位置付けることができた。「驚」は第1報では-.08、第2報では.02と、いずれも、どちらの極にも位置付けられない中性的なものであった。また、因子負荷量の大きさの順位を比較すると、両方とも、プラス感情語群では「喜」「望」「愛」の順に高く、マイナス感情語群では「嫌」「悲」「恐」「怒」の順に高くなっていった。更に、感情語ごとに因子負荷量の差をもとめたところ、その差の絶対値が.10以内になっていることがわかり、因子負荷量の値

がほとんど変動していないことが明らかとなったことを第2報で報告した。

しかしながら、これはあくまで対象語を区別しない場合によるものである。前述した8感情の評定を合成した感情価を求める際に、それぞれの対象語に対する感情語ごとの評定値に、因子負荷量が重みづけされるが、その因子負荷量は、初期には対象語を区別しない場合の主因子解を共通の重みづけとして用い (上杉 1981)、次には対象語別の主因子解をそれぞれの重みづけとして用いていた (上杉 1983, 1984, 1989)。その後上杉 (1989) の考察を受けて、現在では対象語別でなおかつ男女別の主因子解を用いてきている (鈴木他 2008, 2009)。確かに、対象語に対する個別の感情評価を正確に反映させるためには、重みづけとして用いられる因子負荷量、すなわち、その対象に対する潜在的な総合的感情をになう成分としての8感情間の関連性の度合を、それぞれの対象別、男女別にもとめる必要があるであろう。しかしながら、その反面、感情構造の共通性 (安定性) が保てなくなる可能性が出てくることになる。そのことに今までは注意がはらわれていなかったのである。従って、研究 I では、対象語別に得られる主因子解の因子負荷量の値がどの程度安定して得られるものかを、第2報による対象語別の負荷量との比較、対象語を区別しない場合の全体での負荷量との比較をすることで、対象語別の感情イメージ構造の安定性と変動性について検討を加えることとした。

### 2. 分析

(1) 諸対象に共通する一般的な感情構造をもとめるために、8感情 (8変数) を“列”とし、対象 32×調査対象者118=3,776件を“行”とするマトリックスを構成し、8感情間での相関行列を得ることで、因子分析を行った。固有値1.0以上を基準とした主因子法による2因子を抽出し、その後、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は、47.5%であった。

(2) 32対象語ごとに、8感情 (8変数) を“列”として、調査対象者118人 (件) を“行”とするマトリックスとなるようにデータを構成し、8感情間

での相関行列を得ることで、固有値1.0以上を基準とした因子分析を行い、男女別でなおかつ対象語ごとの8感情についての主因子解をもとめた。累積寄与率は、32.4%（「自然」）～55.2%（「家庭」）の範囲内であった。3因子構造を示したものが、6対象（「集団」「社会」「生活」「趣味」「死」「文化」）あったが、いずれも、第1因子はプラス・マイナスの2極構造をその他の場合と同様に示していた。

(3) 第2報（2009年）と本研究における32対象語ごとの主因子解第1因子負荷量において感情語別に差を取り、その絶対値を合計して因子負荷量の総体変動量とし、調査対象者を違えた年間による変動を表した。上位10位までを占めた変動量は1.5～3.0までの値を示しており、上位5位までは平均+標準偏差の値を超えるものであった（平均は1.3で、標準偏差は0.62）。

(4) 本研究における対象語を区別しない場合の主因子解第1因子負荷量と32対象語ごとの主因子解第1因子負荷量とで感情語別に負荷量の差異を計算し、上記同様その絶対値を合計して、因子負荷量の総体変動量とした。上位10位までを占めた変動量は1.5～2.1までの値を示しており、上位4位までは平均+標準偏差の値を超えるものであった（平均は1.2で、標準偏差は0.41）。

(5) 上記(3)(4)から、変動量の比較的大きい対象語とその対象語と対となるような単語（例：「姉妹」に対する「兄弟」など）を含めたものを除いて、16の対象語を選定し、それに対して改めて、諸対象に共通する一般的な感情構造をもとめるために、8感情を“列”とし、対象16×調査対象者118=1,888件を“行”とする因子分析を行った。固有値1.0以上を基準とした主因子法による2因子を抽出し、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は、41.6%であった。

### 3. 結果

(1) 対象語を区別しない全体としての因子分析の結果を、Table 3に示した。主因子解の第1因子負荷量には、正負の符号（+と-）双方が認められ、この因子が両極的な軸を示しており、一側に、感情語の「喜（-.74）」「愛（-.57）」「望（-.54）」、

＋側に「嫌（.77）」「悲（.68）」「恐（.63）」「怒（.49）」、そして、「驚（-.06）」は0に近い値になっていることがわかった。また、第2因子負荷量は、「望（.42）」を筆頭に、同符号の一極的な軸を示しており、「恐（.40）」「驚（.39）」「喜（.38）」「怒（.37）」「愛（.32）」「悲（.24）」「嫌（.10）」と続いていることがわかった（Table 3.）。第2報（2009年）の同じ感情語との差異を算出してみると、第1因子では「驚」を除く7感情が絶対値0.05程度になっていて、比較的差の大きかった「驚」は絶対値1.4であった。第2因子では「悲」「嫌」を除く6感情が絶対値.05程度になっており、比較的差の大きかった「悲」は絶対値.09で「嫌」は.12であった。いずれも概ね0.1程度以内の変動で、負荷量の値にほとんど変化のないことが確認された。また、各感情語間における負荷量の大きさの順位を両年で比較すると、第1因子では「愛」と「望」が前後で入れ替わり、第2因子では、「驚」が4位から2位になったことと、「悲」と「愛」が前後で入れ替わっているだけで、他は同じ順番を示すものとなっていた。

Table 3. 対象語を区別しない場合の8感情因子負荷量

感情語	N=118		バリマックス解	
	F1	F2	F1	F2
1. 喜	-0.74	0.38	0.80	-0.22
2. 望	-0.54	0.42	0.69	-0.05
3. 愛	-0.57	0.32	0.64	-0.15
4. 驚	0.06	0.39	0.22	0.33
5. 悲	0.68	0.24	-0.35	0.64
6. 恐	0.63	0.40	-0.19	0.72
7. 怒	0.49	0.37	-0.11	0.60
8. 嫌	0.77	0.10	-0.51	0.59

(2) 本研究における32対象語別に対する8感情語主因子解因子負荷量（正負の符号はプラス感情が+になるように調整）と第2報における同様の因子負荷量をTable 4.に示した。また、両者間での変動量を年間変動、(1)における対象を区別しない場合の全体としての負荷量との間の変動量を対全体変動として同表の右側に提示した。更に、そ

れぞれの変動量の上位10位を示す対象語において、2つの変動量ともに該当する場合には◎、どちらか一方に該当する場合には○を記したものを最右翼の列に提示した (Table 4.)。

年間変動と対全体変動ともに上位10位以内に該当する対象語は、「妻」「姉妹」「近隣」「職場」「仕事」「病気」「人類」の7対象であり、年間変動のみ上位に該当する対象語は、「私」「文化」「芸術」の3対象、対全体変動のみに該当するものは、「母」「夫」「死」の3対象であった。これらの対象語は、

平均値+1SD程度に近く、またそれ以上に相当するものでもあった。

また、感情語別に絶対値.50程度の負荷量の変動を示した対象を多い順に表すと、年間の差異において、「驚」が最も多く「職場 (.48)」「仕事 (.50)」「病気 (.73)」「芸術 (.45)」の4対象語、次に「望」で「私 (.57)」「姉妹 (.45)」「職場 (.52)」の3対象語、その後は、「喜」は「私 (.47)」、「悲」は「文化 (.51)」、「恐」は「私 (.51)」とそれぞれ1対象語となっていた。「愛」「怒」「嫌」には

表4. 対象語ごとの感情語因子分析因子負荷量の年度比較とその変動および全体での感情語因子分析因子負荷量との変動

対象	2010年 (本研究における対象別因子負荷量)								2009年 (昨年度における対象別因子負荷量)								対応する負荷量の差の絶対値合計		
	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	年間変動	対全体変動	上位
私	.71	.49	.47	.08	-.64	-.30	-.62	-.71	.24	-.08	.26	-.24	-.83	-.76	-.71	-.79	2.4	0.9	○
父	.53	.28	.62	-.15	-.59	-.54	-.71	-.70	.65	.38	.72	.06	-.49	-.58	-.51	-.69	0.9	1.1	
母	.43	.19	.36	-.26	-.53	-.71	-.71	-.79	.55	.34	.46	-.22	-.59	-.70	-.79	-.72	0.6	1.6	○
夫	.32	.13	.48	-.41	-.60	-.71	-.64	-.75	.23	.14	.25	-.38	-.84	-.68	-.75	-.75	0.7	1.6	○
妻	.37	.21	.36	-.33	-.78	-.66	-.67	-.69	.77	.49	.70	.03	-.53	-.28	-.41	-.51	2.5	1.6	◎
兄弟	.47	.28	.35	-.20	-.61	-.73	-.68	-.83	.66	.40	.69	-.04	-.67	-.66	-.58	-.56	1.3	1.3	
姉妹	.47	.07	.34	-.30	-.74	-.73	-.58	-.74	.54	.52	.72	-.03	-.63	-.66	-.69	-.54	1.7	1.5	◎
恋人	.55	.41	.63	.00	-.66	-.70	-.42	-.70	.56	.39	.70	.08	-.51	-.57	-.66	-.75	0.8	0.7	
友人	.68	.51	.58	-.13	-.49	-.71	-.48	-.62	.57	.52	.49	-.05	-.73	-.72	-.79	-.72	0.9	0.6	
仲間	.78	.31	.45	-.16	-.45	-.71	-.75	-.56	.47	.39	.47	.04	-.69	-.70	-.73	-.82	1.1	1.3	
家族	.68	.35	.64	-.21	-.71	-.67	-.68	-.78	.77	.57	.69	-.03	-.65	-.71	-.69	-.78	0.6	0.7	
家庭	.72	.47	.71	-.15	-.82	-.69	-.72	-.82	.58	.45	.65	.09	-.81	-.80	-.72	-.63	0.8	0.8	
親類	.46	.38	.50	-.28	-.68	-.76	-.64	-.73	.17	.23	.36	-.37	-.67	-.76	-.77	-.77	0.9	1.1	
近隣	.32	.08	.25	-.37	-.57	-.78	-.72	-.78	.51	.26	.47	-.11	-.49	-.51	-.60	-.64	1.5	2.0	◎
学校	.68	.54	.37	.09	-.69	-.62	-.55	-.75	.65	.45	.30	.16	-.56	-.77	-.62	-.78	0.6	0.5	
集団	.48	.35	.51	-.13	-.50	-.72	-.73	-.69	.69	.44	.68	.05	-.54	-.68	-.54	-.72	0.9	1.2	
職場	.33	.08	.26	-.18	-.71	-.60	-.68	-.74	.66	.60	.49	.30	-.28	-.27	-.24	-.51	3.0	1.6	◎
社会	.54	.46	.16	.16	-.52	-.49	-.36	-.75	.43	.20	.30	-.10	-.69	-.60	-.51	-.73	1.2	1.4	
仕事	.43	.10	.17	-.22	-.74	-.56	-.47	-.79	.61	.50	.33	.28	-.61	-.41	-.54	-.59	1.8	1.5	◎
勉強	.75	.65	.51	.26	-.51	-.39	-.60	-.55	.69	.65	.59	.38	-.56	-.35	-.48	-.58	0.5	1.3	
生活	.59	.40	.28	-.27	-.64	-.58	-.44	-.76	.68	.48	.46	.13	-.73	-.44	-.61	-.61	1.3	0.9	
遊び	.64	.17	.18	-.12	-.64	-.43	-.57	-.77	.50	.54	.37	.24	-.65	-.61	-.68	-.74	1.4	1.2	
趣味	.55	.38	.33	-.03	-.66	-.68	-.76	-.82	.63	.52	.28	.01	-.73	-.78	-.66	-.82	0.6	1.0	
旅	.66	.56	.29	.18	-.50	-.57	-.57	-.83	.58	.44	.23	.32	-.66	-.54	-.66	-.61	0.9	1.0	
健康	.64	.65	.30	-.06	-.55	-.51	-.57	-.75	.80	.56	.05	-.10	-.60	-.47	-.49	-.63	0.8	0.8	
病気	.37	.30	-.01	-.42	-.78	-.68	-.26	-.60	.54	.59	.12	.30	-.55	-.57	.06	-.66	2.1	2.1	◎
生	.53	.47	.52	-.05	-.54	-.52	-.44	-.76	.73	.55	.69	.23	-.52	-.40	-.55	-.68	1.1	0.6	
死	.33	.37	.35	.02	-.57	-.70	.00	-.66	.64	.65	.36	-.16	-.63	-.39	-.13	-.58	1.3	1.7	○
文化	.51	.43	.53	.11	-.75	-.39	-.54	-.73	.32	.32	.42	.34	-.24	-.47	-.42	-.51	1.6	1.0	○
芸術	.53	.36	.45	.13	-.48	-.58	-.54	-.75	.73	.67	.61	.57	-.13	-.20	-.17	-.51	2.5	1.0	○
人類	.17	.10	.19	-.16	-.80	-.61	-.65	-.76	.54	.44	.44	-.02	-.66	-.54	-.57	-.63	1.5	1.8	◎
自然	.41	.45	.48	-.14	-.47	-.35	-.54	-.68	.31	.16	.34	.03	-.74	-.35	-.53	-.70	1.0	1.2	

※”上位”の◎は昨年との差と全体との差が両方も上位10位であるもの、○はどちらか一方であるもの

該当するものがなかった。対全体での差異においては、「望」が最も多く「姉妹(.47)」「近隣(同)」「職場(同)」「人類(.45)」の4対象、その後は、「喜」が「人類(.56)」、「愛」は「病気(.59)」、「怒」は「死(.48)」で1対象語となっており、「驚」「悲」「恐」「嫌」には該当するものが認められなかった。(3) 上記(2)で変動量の大きいことが確認された「私」「夫」「妻」「姉妹」「近隣」「職場」「仕事」「病気」「死」「文化」「芸術」「人類」に加えて、「姉妹」の対になる対象語である「兄弟」、「死」の対になる「生」、「文化」の対になるような「自然」、また、課題という意味では「仕事」と同様な意味を持つと思われる「勉強」を含めた16対象を除く、その他の16対象を、変動量が安定してなおかつ対語としての対照性が保たれているものとして選定した。なお、「母」は本来は、変動性の大きい対象語であったが、「家庭」や「家族」との意味的な関連性を重要視して、対象語として残すものとした。この選定された16対象語に対して、改めて対象語を区別しない全体としての因子分析の結果を、Table 5に示した。

主因子解の第1因子負荷量には、正負の符号(+と-)双方が認められ、一側に、感情語の「喜(-.64)」「愛(-.45)」「望(-.41)」、+側に「嫌(.74)」「恐(.64)」「怒(.62)」「悲(.61)」、そして、「驚(-.08)」は0に近い値になっていることがわかった。32対象(Table 3.)での同じ感情語との負荷量の差異を算出してみると、相対的により変化した感情語は「怒」(差異絶対値.14)、「望」「愛」(同.13)、「喜」(同.10)であり、負荷量の大きさの順序性は、マイナス感情語群の「悲」が他のマイナス感情語が変化しただけ順位を2つ下げた。また、マイナス感情の負荷量は「怒」の値が変化したことで、「嫌」を除く他の「恐」「悲」と同程度の因子負荷量(.60程度)になっていた。次に、第2報(2009)の32対象における全体でのバリマックス解と本研究での32対象のバリマックス解、および選定した16対象における全体でのバリマックス解を回転解の二つの軸にプロットしたものが、Figure 1.である。これによると、いずれの場合のバリマックス解も、「喜」「望」「愛」は第4象限、「嫌」「恐」「悲」「怒」は第2象限、

「驚」が第1象限に位置していることが認められた。

Table 5. 選定16対象に対する因子負荷量

感情語	主因子解		バリマックス解	
	F1	F2	F1	F2
1. 喜	-0.64	0.41	0.71	-0.27
2. 望	-0.41	0.44	0.60	-0.07
3. 愛	-0.45	0.30	0.50	-0.18
4. 驚	0.08	0.38	0.25	0.29
5. 悲	0.61	0.18	-0.22	0.60
6. 恐	0.64	0.33	-0.12	0.71
7. 怒	0.62	0.28	-0.15	0.66
8. 嫌	0.74	0.07	-0.39	0.64

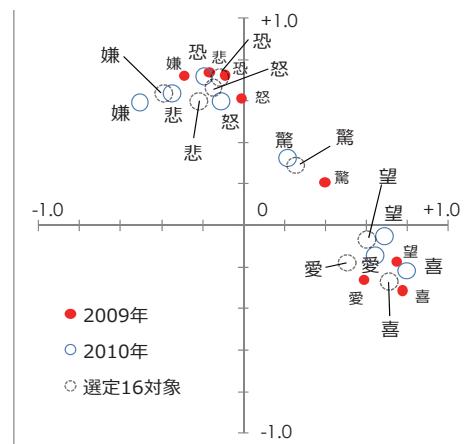


Figure 1. 感情語の因子負荷量のバリマックス解プロット

#### 4. 考察

(1) 本研究と第2報(2009)の諸対象を区別しない感情イメージの因子構造を比較したところ、主因子解の第1因子、第2因子とも、同一感情語の因子負荷量の変動は「驚」を除き、概ね絶対値.05程度以下となっていることや、値の大きさの順番がほぼ同一であったことから、感情イメージは同一の構造を表し、全ての感情語において同程度の連関性をもっているものと考えることができた。また、第2報では第1報(2008)との同一構造と同程度の連関性を持つことが結論されていることから、直近の3年間における諸対象を区別

しない感情イメージ構造はかなりの安定性を持っており、顕著には変化しないものであることが示唆されるであろう。しかしながら、「驚」に関しては、第2報から比較的大きな変動を示していた(絶対値0.14)ことを明示しなければならない。この変動量は、第1報(2008)で、「驚」に関して上杉(1981, 1989)との間に比較的大きな差異を認めるところとなった絶対値0.14~0.15と同程度になっている。だとするならば、「驚」は単なる経年変動というよりは、経年も含めて調査対象者の属性や時代背景、あるいは年ごとの世相などを反映しやすい対象に向けての感情であることが示唆されることになるだろう。おそらく、第1報で比較的大きな変化を認めえたもう一つの感情語「怒」も同様な理由を考えることができる。

(2) 対象語別にみた8感情語についての主因子解の年間の変動量(8感情ごとの変化量の絶対値計)の平均値は1.3となっており、1感情分で0.16(1.3÷8)になる。対全体の変動量では1.2(1感情分0.15)になる。その意味では、考察(1)で示した通り、対象語を区別しない場合の感情語ごとの主因子解第1因子における最高変動値(絶対値)は「驚」の0.14であったことを考えると対象語別の場合の年間変動あるいは対全体変動は比較的大きいものがあることが伺える。年間においても対全体においても変動量の大きかった「仕事」「職場」は個人とその対象との関係性にとどまらず、背景に社会的な経済状況の動向を従えていると考えられるものであり、調査対象者が将来的な視点に立つ際に関心が高い対象語とはなるが、「家族」や「学校」のように、日頃から常に身近で接しているものとはならない。その意味では、社会情勢や環境変化によって影響を受けやすく、あるいは身近に感じられるような対象ではないものは、感情語間の関連性を一貫した状態に保つことが難しく、その変動量が大きくなることが予想されることになる。「文化」「芸術」「自然」なども、それがあがる場所に移動して体験しなければならないことが多く、身近に感じられるものとはなりにくい。「病気」や「死」も身近で接する対象とは言いにくいかもしれない。「夫」「妻」などは特に大学生にとってはまだまだ先のことで現在では意識され

にくいものであるだろう。従って、その逆の変動量の比較的小なかった「家族」「家庭」や「学校」「友人」、更に「趣味」「遊び」などは、誰においても密接に生活に関わっている対象であるし、社会的な情勢に影響されることの少ない対象となっていることが示唆されることになった。

## 研究Ⅱ 選定16対象における感情価によって表わされる諸関連

### 1. 目的

対象語に対する8感情についての評定値に対しては、主因子解第1因子負荷量を重みづけ、潜在的な統合感情の感情価が合成値として第1報・第2報で算出されてきた。その際に、重みづけとして用いる因子負荷量は、対象語別および男女別の8感情評定値における主因子解の因子負荷量を用いるもので、それによって諸対象語の感情イメージ構造の特異性、また男女別の特異性を反映させてきた。しかしながら、本第3報の研究Ⅰで、対象語を区別しない8感情についての主因子解第1因子負荷量と対象語を区別した因子負荷量との変動量を算出することにより、比較的大きな安定性のある16対象語を選定することができたことで、顕著な変動を示すもの、すなわち感情イメージ構造がより特異な対象語を感情価算出の対象から除外することを可能にした。

また、対象語別更には男女別における感情イメージ構造を調べて重みづけ値を決定するためには、対象語数×男女別(32対象語の場合は、64回、選定16対象語でも32回)の因子分析を実施しなければならない。このことは上杉(2000)が感情イメージ研究の展望として記述した“感情イメージ検査(テスト)”への一般化に際して、大きな問題となってくる。それは、対象語には調査対象者を変えた場合の感情イメージ構造の変動が比較的大きいものがあることを研究Ⅰで予見しうようになったからだ。検査として成立させるためには重みづけの決定を検査プロセスの中を含めることは、到底現実的とは言えないのである。

そこで、研究Ⅱでは、選定された16対象語に



において、対象語を区別しなかった場合の8感情についての主因子解第1因子負荷量を、感情価をもとめる際に共通の重みづけとした場合と、対象語別に得られた因子負荷量を重みづけとして用いた場合とで、対象語の感情価に顕著な違いが出るかどうかを調べることにした。また、感情価という指標をもつ諸対象が、どのような関連性を示し構造化しうるものとなっているのかを、両者の重みづけを用いた感情価で比較検討することにした。更に、第2報で一定程度の有意性を確認できた諸対象における感情価とパーソナリティ特性との関連、異なる対象語群(ここでは、選定からはずれた対象語)との関連を導き出すを試みることにした。

## 2. 分析

(1) 主因子解で正負両極の構造が見られる因子(多くは第1因子)の因子負荷量を重みづけとして、対象語別に重みづけを変える場合と、共通した重みづけを与える場合の2種類について、8感情の合成得点としての「感情価」 $T_{ij}$ をもとめた。 $T_{ij}$ は対象*j*に対する調査対象者*i*の感情価で、対象語別に重みづけを変える場合の算定方法はA式、対象語を区別しないで共通した重みづけを与える場合の算定方法はB式のように、

$$A : T_{ij} = \left( \sum W_{jk} \times t_{ijk} \right) \div \sum |W_{jk}| \times 10$$

$$B : T_{ij} = \left( \sum W_k \times t_{ijk} \right) \div \sum |W_k| \times 10$$

として定義される。ここで、A式の $W_{jk}$ は対象に対する感情*k*の重みづけであり、男女別にもとめられた32対象語の8感情についてのそれぞれの因子負荷量を意味している。因子負荷量を利用した実際の対象語別・男女別の重みづけは、Appendix 1に示した。B式の $W_k$ は共通して与えられる感情*k*の重みづけであり、対象語を区別しないで8感情について行った因子分析の因子負荷量を意味している。 $t_{ijk}$ は調査対象者が対象*j*をイメージして、感情*k*との<近さ-遠さ>を評定した評定点で、「近い」=+2点、「やや近い」=+1点、「どちらともいえない」=0点、「やや遠い」=-1点、「遠

い」=-2点として数量化したものである。これにより、理論値としての「感情価」は+20~-20に分布した。

(2) 算出された対象語ごとの「感情価」によって、A式とB式によるそれぞれの場合の16対象間の相関行列を得ることで、最尤法による因子分析を行い、固有値1.0以上を基準として、3因子を抽出したのち、回転バリマックス解を得た。共通の重みづけ(B式)を用いた場合の累積寄与率は67.9%であり( $\chi^2$ 値131.4, 自由度75,  $p=0.00$ )、対象語別の重みづけ(A式)を用いた場合の累積寄与率は67.0%であった( $\chi^2$ 値121.6, 自由度75,  $p=0.00$ )。因子を構成する対象語は両者とも一致しており、F1を構成するものとして「父」「母」「家庭」「家族」「親類」、F2では「恋人」「友人」「仲間」「学校」「集団」「社会」「生活」、F3は「趣味」「遊び」「健康」「旅」となっていた。F1には、「近親(proximity)」、F2は「協調(cooperation)」、F3は「充足(sufficiency)」の対象と命名した。

(3) 日本版NEO-PI-Rは、因子分析的研究によって抽出された概念的モデルが具体化されており、健康的な人格面の測定をする計30の特性が、①神経症傾向(neuroticism)、②外向性(extraversion)、③開放性(openness)、④調和性(agreeableness)、⑤誠実性(conscientiousness)の5つの次元に集約されるとする構成的な人格検査である。感情イメージ調査の後日に実施・回収した後、検査マニュアル(下仲他 1999)に示された採点方法に基づいて、5つの次元の得点を算出した。対象語に関する上記3因子については、それぞれの因子を構成する対象語の感情価を合計し、対象語の数を除算することで、その因子の感情価尺度得点とした。この得点と性格次元の得点との関連を、ピアソンの積率相関係数をもとめることによって数量化した。

(4) 研究Iで除外された「仕事」「職業」についての感情価を合計し対象語数2で除算したものを常識的な意味上の関連性から一つの尺度として扱い、これを「職務従事」の対象に対する感情価尺度得点とした。また、「夫」「妻」に関しても同様にして「夫婦形成」の対象、更に、「文化」「芸術」「自然」を「鑑賞行為」の対象に対する感情価尺度得

点とした。(3)で命名した3因子それぞれの尺度得点を含め、6尺度でパス解析を行った。モデルの概要としては、「職務従事」に関しては「F2.協調 (cooperation)」、「夫婦形成」に関しては「F1.近親 (proximity)」、「鑑賞活動」に関しては「F3.充足 (sufficiency)」が主たるパスを経路としてもつことを仮定した。

### 3. 結果

(1) 選定16対象語における重みづけの方法別の感情価とバリマックス回転解における対象語の感情価についての因子負荷量をTable 6.に示した。共通した重みづけを用いたB式と対象語別の重みづけを用いたA式の差異の絶対値は、0.2~0.6までの範囲を示しており、それぞれの対象語についての感情価の標準偏差と比較してみると、全てが10分の1程度以下に収まっていた。したがって、両方式による感情価の値には顕著な変動が認められないことがわかった。また、B式による感情価の上位5位は「趣味 (13.5)」「遊び (12.3)」「健康 (12.1)」「家庭 (11.8)」「仲間 (11.7)」、A式では「趣味(13.8)」「遊び(12.9)」「健康(12.3)」「家庭 (11.7)」「旅 (11.6)」となっており、第4位までは一致していて、これらの対象には比較的ポジティブな感情を抱いていることがわかった。次にB式による下位5位は「社会 (2.5)」「集団 (6.9)」「父 (7.0)」「学校 (8.7)」「生活 (8.9)」、A式では「社会 (3.0)」「集団 (6.6)」「父 (6.7)」「生活 (8.2)」「母 (8.8)」となっており、5つのうち4つまでは一致していて、これらの対象には比較的ネガティブな感情を抱いていることがわかった。

Table 6. 選定16対象語の感情価と因子負荷量(重みづけ方法の比較)

対象語	対象語の感情価のバリマックス解						感情価			
	共通W: B式			対象・男女別W: A式			B式		A式	
	F1	F2	F3	F1	F3	F2	平均	SD	平均	SD
家族	.88	.31	.17	.88	.29	.18	11.0	6.70	10.6	6.75
家庭	.85	.26	.29	.86	.27	.27	11.8	6.68	11.7	6.80
母	.77	.21	.32	.77	.21	.35	9.4	6.73	8.8	6.72
父	.67	.28	.07	.64	.28	.02	7.0	7.08	6.7	7.14
親類	.59	.32	.32	.61	.31	.34	9.1	6.30	9.4	6.41
学校	.16	.71	.36	.16	.64	.35	8.7	6.79	9.1	6.98
集団	.31	.69	.26	.29	.74	.28	6.9	7.39	6.6	7.47
友人	.39	.67	.39	.40	.63	.38	11.6	6.07	11.4	6.19
仲間	.37	.65	.51	.39	.64	.50	11.7	6.15	11.4	6.23
生活	.51	.56	.38	.54	.50	.37	8.9	5.96	8.2	6.31
社会	.28	.52	.04	.24	.52	.03	2.5	6.62	3.0	6.70
恋人	.43	.49	.41	.41	.51	.35	10.9	6.68	10.7	6.58
趣味	.25	.12	.84	.21	.11	.87	13.5	5.57	13.8	5.38
遊び	.08	.36	.74	.10	.30	.75	12.3	5.17	12.9	5.26
健康	.31	.21	.71	.30	.20	.70	12.1	6.17	12.3	6.19
旅	.24	.43	.64	.21	.40	.68	10.9	5.47	11.6	5.50

(2) 共通した重みづけを用いたB式と対象語別の重みづけを用いたA式で抽出された3因子のバリマックス解における因子構成は、全く同一のものと判断することができた。A式の場合の「生活」は、機械的にはF1.因子に分類されるものだが、負荷量の差が.04程度しか変わらないF2.因子として分類することで、B式の場合の因子構成とまったく同じにすることができたからである。したがって、重みづけの方式を変更しても、選定16対象の場合は、それによってもとめられた感情価を指標とした対象語間の関連性に全くと言っていいほど影響を与えていないことがわかった。

(3) NEO-PI-PRによる性格5次元の得点と3つの感情価尺度得点の相関係数表をTable 7.に示した。「F1.近親 (proximity)」の対象と5%水準で有意な相関を示した性格次元は、「神経症傾向 (-.29)」「調和性 (.27)」の2つであった。「F2.協調 (cooperation)」では「神経症傾向 (-.39)」「外向性 (.43)」「調和性 (.28)」「誠実性 (.35)」の4つ、「F3.充足 (sufficiency)」は「外向性 (.28)」の1つであった。したがって、最も多くの次元と関連していた「F2.協調」の対象にポジティブな感情をいだく者は、「開放性」を除く全ての性格特性の在り方が高評価になっていることがわかった。また、性格次元としては「開放性」が関係している感情価尺度を認めることができず、「誠実性」は「F2.協調」とやや弱い相関を示すのみとなった。

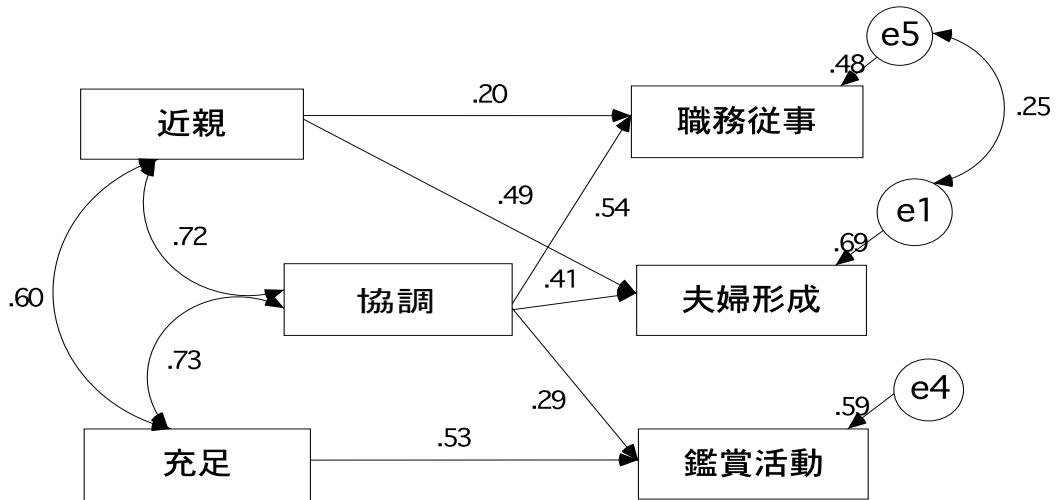


Figure 2. 感情価尺度得点間のパス図とパス解析の結果（数値は標準化推定値）

Table 7. 性格5次元得点と感情価尺度得点との相関係数

	神経症 傾向	外向性	開放性	調和性	誠実性
F1.近親 (proximity)	-.29	.22	-.03	.27	.24
F2.協調 (cooperation)	-.39	.43	.03	.28	.35
F3.充足 (sufficiency)	-.08	.28	.08	.10	.13

※網掛けをしている部分は、5%水準で有意な相関を示したもの

(4) パス解析の結果、Figure 2.で示されているようなパスとその推定値（標準化推定値）が得られた。これらの推定値は、全て5%水準で有意であった。適合度指標は、GFI=.978, AGFI=.908, CFI=.994, RMSEA=.073, CMIN ( $\chi^2$ 値8.127, 自由度5,  $p=0.15$ )となっており、十分な適合性が示された。「F3.充足」から「夫婦形成」にパスが引かれた場合、AIC基準では40.1から38.4となるのでより適合性が高まるが、標準化係数が.14となり5%水準で有意とはならなかったために、上記のモデルの方を採用した。選定された16対象で構成されている3因子は「F1.近親」「F2.協調」「F3.充足」ともに相関係数が高く、因果性を想定することができなかった。一方、その他選定には除外された対象語で構成された「職務従事」は「F2.協調 (.54)」「F1.近親 (.20)」の順に影響を受けていること、「夫婦形成」は「F1.近親 (.49)」「F2.協調 (.41)」の順に影響を受け、「鑑賞活動」は「F3.

充足 (.53)」のみから影響を受けていることがわかった。

#### 4. 考察

(1) 選定された16の対象語についての8感情の評定を合成して感情価を算出する際に、2つの方式による結果を比較してみたところ、両者は、それぞれの対象語における感情価の値の変動性(差異)においても、感情価の値の高低の順番においても、顕著な差異が確認されなかった。また、対象ごとの感情価の関連性に関しても、バリマックス解で示された3因子の因子構成が完全に一致したと言ってもよい結果となり、関連性に関しても両者の方式による顕著な差異が確認されなかった。このことにより、年間変動性や対全体変動性の少ない比較的安定した対象語を用いれば、対象語ごとに重みづけを変更するA式を採用する必要はなく、最も簡便な重みづけであるB式、すなわち、対象語を区別することなく、8感情についての因子分析を行った場合の第1因子負荷量を、共通の重みづけとして用いることで同等の結果が得られることにより、その有効性が示唆されたものと考えてよいだろう。更に言えば、第1報・第2報で、対象語を区別しない場合の8感情についての因子分析の結果は、かなりの程度一致した主因子解負

荷量を示していたし、16対象に選定した場合の同様な因子分析の結果も概ね一致しているものであった。このことは、重みづけを定数として固定することができる可能性を示唆するものとなるであろう。

(2) 神経症傾向と負の弱い相関を示した「F1.近親」「F2.協調」の対象となるのは、身近にいる人あるいは身近な所属先(学校)およびそこにいる他者を示すものと考えられ、対人関係的な性質をもつ対象語が多い。情緒的に不安定な状態であったり、ネガティブな感情を感じやすい者にとっては、その感度がより身近な人に向けられることも多いであろう。そのようにしてこれらの対象にあまりポジティブな感情を抱かないのかもしれない。あるいは、逆に、身近な者にポジティブな感情を抱けないでいると、身近に接する機会が多い分だけ意識するようになってしまい、情緒的な不安定が生じやすくなってしまふのかもしれない。結果的に、ポジティブな思いを抱けない状態の中に身を置かざるを得ないところにこの傾向の問題点があると言えるだろう。これと同様な観点が「調和性」にも当てはまり、調和できないとネガティブ感情を抱き、そうなると、ますます調和できないというように、一種の悪循環となってしまう。「F2.協調」の対象は、比較的多くのパーソナリティ傾向と関係があり、この対象に対するポジティブではない感情傾向が、様々なパーソナリティ上の問題を生じさせる中核となることを予見しうるものであった。

(3) パス図の中で、最もパスを出している感情価尺度は「F2.協調」であり、今回提示した、選定対象以外の対象語の3つの尺度の全てに有意なパスを出しており、一定程度の影響を与えることのできる対象であることがわかった。このことは、「F2.協調」を表わす身近な対象にポジティブな感情を抱ければ、身近ではないが生活を取り巻く他の多くの対象に対しても、ポジティブな感情を抱きやすいこと、逆に言えば、もし、ポジティブな感情を抱けないと、その他の対象にも全般的にポジティブな感情を持つことができなくなる可能性を考えさせるものとなっており、ここでも、この「F2.協調」が、身近に取り巻いている諸対象の中

でも中核部分を占めることは、まず間違いがないことが示唆されることとなった。しかしながら、一方で、この「F2.協調」は、他の身近な対象を意味する「F1.近親」「F3.充足」を表わす対象との相関係数がやや高くなっている。「F1.近親」対象との間や、「F3.充足」対象(趣味や旅をもつこと)にポジティブな感情が抱けるようになれば、そのことが「F2.協調」を表わす対象への感情的関与における改善を間接的に支援する可能性も残しているものと言えよう。

### 研究Ⅲ 感情価における感情語の評定値の予測性

#### 1. 目的

上杉(1981)による「感情イメージ」の研究が始まって以来現在に至るまで、部分的にも変更されずに用いられてきているのが、「喜」「愛」「望」「驚」「悲」「恐」「怒」「嫌」の8つの感情語である。潜在的な全体的感情を想定し、その成分として8つの感情を取り上げているのだが、もちろん、その成分が8つしかないを上杉が考えていたわけではない。「驚」を中性感情として位置づけたとき、別の中性感情を加えることを検討したいとも述べている。また、初期の頃ではあるが、プラス感情マイナス感情の次元ではない別の次元を主因子解の第2因子に見ていることについても触れている。比較的多くの感情語を追加して分析をすれば、Osgood, C.E. et al (1957) が提言した単語の内包的意味におけるE-P-Aの3次元“evaluation (good or bad)”, “potency (strong or weak)”, “activity (fast or slow)”と類した構造を見出すことが可能となるのかもしれない。

しかし、現状においては、感情イメージ構造として、プラス感情マイナス感情の次元のみしか見出すことができず、結果として、この次元(つまり主因子解第1因子負荷量)を重みづけとした合成値である感情価は、潜在的な統合感情のポジティブ傾向とネガティブ傾向を表わすのみにとどまっているのである。ここで現実的な問題提起をすると、現行の感情価がたとえ8感情の構造的性を反映するような定義式を用いて計算していたとしても、感情間での類似性や対極性が強ければ強い

ほど構造的利点が薄らぐことは否めない。

そこで本報研究Ⅲでは、構造的性を捨象して算出されている感情価のみを予測するためであったら、いったいどの感情語が不可欠か、また、不必要なのか。すなわち、感情価の予測を考えた場合の8感情語の選定を検討することを目的とした。

## 2. 分析

(1) 対象語ごとの感情価を従属変数とし、対象語ごとの8感情をイメージした場合の<近い-遠い>のそれぞれの評定値を独立変数として、ステップワイズ法による多重回帰分析を行った。ステップワイズのためのF値確率は統計解析ソフト(SPSS)のデフォルト値(除去:Pout=.10, 投入:Pin=.05)を採用した。選定16対象の対象語における感情価の全てに対して、以上の方法で多重回帰分析を繰返し実施した。

(2) 最も不可欠だと判断された「嫌」について、感情価についての因子分析バリマックス解から得られた因子を構成する対象語の評定値を全て独立変数とし、その因子の感情価尺度得点を従属変数として、強制投入法による多重回帰分析を行った。

## 3. 結果

(1) 選定16対象について、それぞれの対象語における従属変数を感情価として、ステップワイズ法による多重回帰分析を行ったところ、モデル1(変数が1つの場合)に投入された感情語は、「嫌」が最も多く13対象語に及んでいた。その他の対象語では、「家庭」では「悲」、「友人」では「恐」、「仲間」で「喜」が投入されていた。決定係数は、「嫌」が投入された対象語では「集団」の.548から「学校」の.642までの間であったことが確認された。分散分析の結果はいずれも0.1%水準で有意、標準化係数もいずれも同水準で有意で、「集団」の-.743から「学校」の-.843までの間を示していることがわかった。また、モデル8(変数が8つ全部の場合)で最後に投入された感情語は、全ての対象語で「驚」であった。標準化係数は「集団」での-.016から「遊び」の-.027までの範囲にあることが確認された。

(2) 従属変数として3つの因子における感情価尺

度得点、独立変数として因子を構成する対象語についての「嫌」の評定値を設定し、強制投入法で多重回帰分析を行った結果をTable 7.に示した。「F1.近親」の対象における感情価尺度得点において、標準化係数の高い順にあげると、「母-嫌」(-.342)「家族-嫌」(-.306)「親類-嫌」(-.280)「父-嫌」(-.179)「家庭-嫌」(-.122)となっており、「家庭」では有意水準5%、その他の対象語においては有意水準0.1%で標準化係数は有意であった。決定係数 $R^2$ は0.87であった。次に、「F2.協調」の対象における感情価尺度得点においては、同様に、「生活-嫌」(-.243)「学校-嫌」(-.241)「社会-嫌」(-.220)「恋人-嫌」(-.204)「集団-嫌」(-.148)「仲間-嫌」(-.140)「友人-嫌」(-.101)の順位となっていて、標準化係数は「友人」では有意水準5%で有意と認められず、その他の対象については有意水準1%で有意が認められた。決定係数は0.76であった。最後に、「F3.充足」の対象における感情価尺度得点では、「旅-嫌」(-.348)「趣味-嫌」(-.322)「遊び-嫌」(-.275)「健康-嫌」(-.222)の順になっており、標準化係数はいずれも有意水準1%で有意であることが認められた。決定係数は0.79であった。

Table 8. 感情価尺度得点に対する評定(嫌)による重回帰

近親 (proximity)		協調 (cooperation)		充足 (sufficiency)	
評定対象	$\beta$	評定対象	$\beta$	評定対象	$\beta$
父	-.179	恋人	-.204	遊び	-.275
母	-.342	友人	-.101	趣味	-.322
家族	-.306	仲間	-.140	旅	-.348
家庭	-.122	集団	-.148	健康	-.152
親類	-.280	学校	-.241		
		社会	-.220		
		生活	-.243		
$R^2$		0.87	$R^2$		0.76
			$R^2$		0.79

※友人-.10のみ、5%水準で有意ではなかった

※ $\beta$ : 標準編回帰係数,  $R^2$ : 決定係数

## 4. 考察

(1) 対象語について得られた8感情の評定値の合成値、つまりその対象語の感情価は、感情の連関性に基づいた重みづけを用いて、加算されることで、成分としての8感情が統合され、潜在的な全体感情の傾向を、ポジティブ・ネガティブとして表わすものであった。しかしながら、感情価をそれぞれの対象の8つの感情についての評定値から

予測するという観点に立って分析をした場合、少なくとも「驚」は影響力が小さいということが明らかとなった。ステップワイズ法で最後に投入される「驚」を除いた7感情での決定係数はほぼ1.0の値を示しているのであった。感情構造を考える際に、「驚」は、中性感情としての位置づけや、他の感情よりも変動しやすいという特異な性質を持つものであり、個々の対象語において、時（例：芸術や文化などの場合）にはプラス感情と同方向に、また時（例：死や病気などの場合）にはマイナス感情と同方向に関連するという特徴も持っていたが、感情価への予測性や影響力という観点からするとかなり弱いものなのであろう。

反対に「嫌」は、16対象のうち13対象（81.3%）までもが最初に投入される変数となっており、影響力はかなり強いものになっている。しかも、感情価において関連性のある対象語をまとめた感情価尺度得点を、それぞれの因子に構成されている対象語の、それぞれに対する「嫌」という感情の評定値だけで、比較的良好的な決定係数を示したのであった。このことから、感情イメージ構造の中核の部分に、その対象に対する好き-嫌いという感情的評価があると考えうるし、また、好き-嫌いこそが感情イメージそのものを代表するような感情状態として考えることも可能であることが示唆されるものとなった。

## 結び

本第3報は、上杉（1981, 1983, 1984, 1989）および一連の第1報、第2報で確認された全体としての感情イメージ構造の安定性とは異なり、対象語ごとにみた感情イメージ構造の安定性を検討するものであった。感情イメージ研究では、対象語に対する8感情語の連関性をもとに、これを重みづけとして用いた「感情価」という指標を算出しているが、この重みづけには、対象語を区別しない8感情についての主因子解第1因子負荷量を用いた方式（上杉 1981）から、対象語ごとの主因子解の負荷量を用いた方式（上杉 1983, 1984, 1989）、そして、男女別の対象語ごとの負荷量を用いた方式（鈴木他 1998, 1989）が用いられて

きた。必然的に、感情価の値は対象語や男女における感情イメージ構造の特性を反映したものであると想定されたが、結果として、感情価に基づく対象語についての因子分析では、因子として構成される対象語が基本的には一致していることが伺えながらも、今まではっきりと一貫した構造を結論することができなかつたのである。

こうした問題点を解決するためにも、感情の連関性において、どの対象語が変動しやすく、あるいは変動しにくいのかを調査し、比較的安定している対象語を選定することが目的とされた。結果として、16の対象語が選定され、これらの対象語が他の対象語と比べ「家庭」「学校」「健康」などの学生生活を取り巻く対象の中でも、特に身近に接している対象であることがわかり、また、選定された16の対象語における対象語間の関連性や、そこから抽出された因子のパーソナリティ特性との関連性、排除された対象語との関連性においても、一定程度の妥当性を明らかにできた。したがって、本報告で選定された16対象語が、感情イメージ調査における対象語の基本セットになる可能性が示唆されるものとなった。

今後は、この基本セットとなるべき対象語の年間での安定性に注視しながら、就職・職業に関連する対象、男女間の婚姻や出産・育児など新しい家庭を築くことに関連する対象など、一時期に身近な問題対象となるものについての対象語を充実させ、これをサブセットとして、基本セットとの関連性を検討する方向にシフトする方向性を見出す必要があると思われる。また、今回は感情語の選定に関しては、少なくとも「驚」は省くことができ、「嫌」は残すべきものであるという結論になったが、複合した感情から構成される感情イメージの構造性を反映するためには、複数の感情語がどうしても必要となる。感情語自体を変更することも視野にいれて、感情語の選定を目指したい。

## Appendix 1. 対象語・男女別の感情価の重み付け (対象語との男女別主因子解より符号の方向を統一したもの)

対象	全体 (N=118)								男性(N=68)								女性 (N=58)							
	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
私	.71	.49	.47	.08	-.64	-.30	-.62	-.71	.82	.40	.38	-.07	-.72	-.38	-.71	-.71	.67	.61	.62	.27	-.47	-.17	-.44	-.72
父	.53	.28	.62	-.15	-.59	-.54	-.71	-.70	.46	.31	.64	-.26	-.72	-.61	-.77	-.78	.73	.40	.71	.12	-.37	-.32	-.55	-.57
母	.43	.19	.36	-.26	-.53	-.71	-.71	-.79	.34	.15	.30	-.34	-.57	-.72	-.70	-.87	.56	.25	.45	-.15	-.52	-.68	-.69	-.74
夫	.32	.13	.48	-.41	-.60	-.71	-.64	-.75	.61	.37	.67	-.33	-.48	-.69	-.48	-.63	.09	-.05	.41	-.40	-.70	-.73	-.72	-.84
妻	.37	.21	.36	-.33	-.78	-.66	-.67	-.69	.62	.30	.49	-.23	-.84	-.66	-.67	-.64	.08	.05	.18	-.44	-.66	-.67	-.65	-.80
兄弟	.47	.28	.35	-.20	-.61	-.73	-.68	-.83	.61	.38	.35	-.13	-.78	-.74	-.69	-.83	.35	.19	.35	-.28	-.44	-.71	-.71	-.82
姉妹	.47	.07	.34	-.30	-.74	-.73	-.58	-.74	.35	.00	.22	-.41	-.77	-.85	-.71	-.72	.66	.15	.66	-.09	-.61	-.51	-.43	-.72
恋人	.55	.41	.63	.00	-.66	-.70	-.42	-.70	.49	.42	.70	-.12	-.76	-.70	-.65	-.65	.62	.45	.63	.22	-.56	-.66	-.14	-.75
友人	.68	.51	.58	-.13	-.49	-.71	-.48	-.62	.61	.73	.55	-.25	-.47	-.67	-.55	-.66	.82	.32	.65	.00	-.51	-.77	-.39	-.67
仲間	.78	.31	.45	-.16	-.45	-.71	-.75	-.56	.66	.33	.41	-.32	-.32	-.75	-.91	-.66	.73	.43	.52	.00	-.67	-.75	-.57	-.55
家族	.68	.35	.64	-.21	-.71	-.67	-.68	-.78	.66	.39	.50	-.28	-.77	-.72	-.64	-.78	.70	.31	.76	-.16	-.65	-.65	-.75	-.77
家庭	.72	.47	.71	-.15	-.82	-.69	-.72	-.82	.67	.65	.67	-.28	-.76	-.68	-.68	-.85	.80	.29	.75	-.03	-.86	-.69	-.78	-.79
親類	.46	.38	.50	-.28	-.68	-.76	-.64	-.73	.31	.46	.48	-.36	-.73	-.77	-.69	-.78	.68	.34	.55	-.17	-.63	-.74	-.56	-.67
近隣	.32	.08	.25	-.37	-.57	-.78	-.72	-.78	.10	.09	.13	-.32	-.71	-.83	-.72	-.87	.55	.02	.36	-.43	-.46	-.71	-.76	-.67
学校	.68	.54	.37	.09	-.69	-.62	-.55	-.75	.61	.57	.21	.09	-.81	-.70	-.58	-.81	.79	.62	.63	.16	-.54	-.43	-.45	-.64
集団	.48	.35	.51	-.13	-.50	-.72	-.73	-.69	.60	.42	.44	-.32	-.55	-.65	-.66	-.58	.33	.29	.62	.06	-.48	-.80	-.80	-.66
職場	.33	.08	.26	-.18	-.71	-.60	-.68	-.74	.47	.44	.50	.05	-.67	-.49	-.66	-.69	.69	.55	.52	.14	-.15	.20	.04	-.24
社会	.54	.46	.16	.16	-.52	-.49	-.36	-.75	.62	.52	.03	.11	-.67	-.57	-.40	-.71	.48	.53	.44	.29	-.25	-.30	-.34	-.69
仕事	.43	.10	.17	-.22	-.74	-.56	-.47	-.79	.70	.31	.44	-.13	-.72	-.46	-.43	-.77	.61	.54	.46	.40	-.36	-.08	-.05	-.24
勉強	.75	.65	.51	.26	-.51	-.39	-.60	-.55	.64	.71	.56	.01	-.49	-.39	-.75	-.54	.74	.61	.51	.51	-.44	-.26	-.33	-.80
生活	.59	.40	.28	-.27	-.64	-.58	-.44	-.76	.47	.61	.09	-.31	-.72	-.56	-.69	-.82	.66	.17	.52	-.22	-.60	-.57	-.14	-.62
遊び	.64	.17	.18	-.12	-.64	-.43	-.57	-.77	.63	.37	.23	-.04	-.72	-.49	-.63	-.83	.65	-.03	.22	-.20	-.52	-.50	-.50	-.73
趣味	.55	.38	.33	-.03	-.66	-.68	-.76	-.82	.62	.54	.27	.03	-.74	-.70	-.76	-.78	.60	.30	.32	-.13	-.53	-.70	-.79	-.82
旅	.66	.56	.29	.18	-.50	-.57	-.57	-.83	.64	.54	.34	.21	-.68	-.41	-.67	-.85	.63	.62	.26	.15	-.44	-.51	-.46	-.82
健康	.64	.65	.30	-.06	-.55	-.51	-.57	-.75	.69	.67	.35	.05	-.63	-.65	-.68	-.81	.55	.73	.49	-.07	-.37	-.35	-.30	-.66
病気	.37	.30	-.01	-.42	-.78	-.68	-.26	-.60	.55	.44	-.04	-.50	-.80	-.79	-.39	-.67	.23	.14	.03	-.34	-.78	-.54	-.08	-.42
死	.53	.47	.52	-.05	-.54	-.52	-.44	-.76	.43	.57	.47	-.10	-.74	-.59	-.56	-.74	.69	.48	.69	.00	-.29	-.35	-.22	-.76
生	.33	.37	.35	.02	-.57	-.70	.00	-.66	.35	.59	.56	-.13	-.53	-.76	-.01	-.68	.34	-.07	.17	.28	-.63	-.60	.04	-.67
文化	.51	.43	.53	.11	-.75	-.39	-.54	-.73	.62	.56	.58	.05	-.77	-.45	-.60	-.83	.68	.69	.55	.38	-.29	.16	-.07	-.29
芸術	.53	.36	.45	.13	-.48	-.58	-.54	-.75	.49	.55	.45	.04	-.40	-.67	-.69	-.87	.63	.30	.61	.28	-.50	-.46	-.20	-.53
人類	.17	.10	.19	-.16	-.80	-.61	-.65	-.76	.16	.21	.16	-.18	-.80	-.71	-.83	-.67	.22	-.06	.22	-.14	-.70	-.52	-.47	-.91
自然	.41	.45	.48	-.14	-.47	-.35	-.54	-.68	.30	.38	.53	-.28	-.64	-.46	-.65	-.70	.09	.15	.04	-.40	-.50	-.58	-.60	-.36

## 参考文献

- Clore,G.L. & Ortony,A Appraisal Theories. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. and Barrett,,L.F. (Eds.), *Handbook of Emotions : Third Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.628-642 2008
- Cornelius,R.R. *The Science of Emotion : Research and tradition in the psychology of emotions* Prentice-Hall,Inc 1996
- Frijda,N.H. The Psychologist's Point of View. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. (Eds.), *Handbook of Emotions : Second Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.59-74 2004
- Izard,C.E. 比較発達研究会訳 感情心理学 ナカニシヤ出版 1996
- Plutchik, R. The multifactor-analytic theory of emotion *Journal of Psychology* 50 153-171 1960
- Scherer,K.R., Schorr,A., & Johnstone,T. (Eds.). *Appraisal process in emotion: Theory, methods, research*. New York : Oxford University Press 2001
- 上杉喬・佐々木正宏 カード式投影法による感情因子の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 15-19 1979
- 上杉喬・佐々木正宏 「俳画的箱庭」における感情投影の基礎研究 — 試論 — 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 95-99 1980
- 上杉喬・松尾春代 「図式的投影法」による家族認知の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 100-104 1980
- 上杉喬・水島恵一 図式的投影法による学生の意識研究 『体験と意識に関する総合研究』 第3集 文教大学人間科学研究会 106-204 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 人間科学研究 第3号 22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 (Ⅱ) — 労働場面における感情イメージ — 人間科学研究 第4号別冊 29-40 1983
- 上杉喬 感情イメージの研究 (Ⅲ) — 労働場面における感情イメージの諸関連 — 人間科学研究 第5号別冊 11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究 (Ⅳ) — 対象による違いと性による違い — 人間科学研究 第11号 1-11 1989
- 上杉喬 感情イメージの研究 (Ⅴ) — SD法による感情イメージの検討 — 人間科学研究 第20号 68-77 1998
- 上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究 (Ⅵ) — 感情価とパーソナリティ特性との関連 — 生活科学研究 第22号 121-132 2000
- 水島恵一 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ — 「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて 文教大学紀要 第12集 1-11 1978
- 水島恵一 「体験と意識」研究の方法論 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 1-8 1979
- 水島恵一・上杉喬 編 イメージの基礎心理学 誠心書房 1983
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』についての研究 — 年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性 — 人間科学研究 第30号 121-131 2008
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』についての研究 (Ⅱ) — 諸対象についての感情価尺度の因果論的構造と性格次元との関連性 — 人間科学研究 第31号 189-205 2009
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威 対象語の感情的評価とイメージの鮮明性、空想傾向との関連 — 「感情イメージ」の有意味性の検討 — 日本イメージ心理学会第11回大会発表論文集 40-41 2010.23-24
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 日本版 NEO-PI-R, NEO-FFI使用マニュアル 東京心理株式会社 1999